

成熟を目指して(4) 神の臨在にふれる礼拝 その1

2017年4月23日(日)

梶原 剛

## 1.はじめに

おはようございます。

1月から3回に分けて、クリスチャンとしての成熟について考えました。イエスキリストを信じること、救われること、救われた喜びに満たされること、これらは大変重要なことです。しかし、これらはクリスチャンとしてのスタートであって、ゴールではありません。その先があることについて学びました。また、成長とは偶然の結果ではなく、神は最初に進むべき道、ゴールを示されること、そして、最初からすべてを理解することはできないが、後でわかるようになることをヨハネの生涯を通して学びました。さらに、エリヤの生涯を通して、進むべき道、ゴールがはっきりしても、うまくたどり着けない、失敗することがあるが、神は初めから私たちが失敗することをご存知であること、そのような弱い私たちが神は初めから受け入れた上で、進むべき道やゴールを示して下さっていることを学びました。

これら3回の学びを通して端的に学べることは、神が私たちを助けてくださるという平安と自信を持って、クリスチャンとしての高嶺をめざしてみよう！ということです。遠慮せず、躊躇せずに、前に向かって進んでみよう！ということでもあります。

では、今日から何回かに分けて「礼拝」について学んでみたいと思います。私たちに与えられるそれぞれのゴールは違うと思いますが、私たちが共通して学ぶべき重要なことかと思えます。まず、礼拝とは何？という点について考えてみたいと思います。

## 2.礼拝とは何？

礼拝という言葉は初めて聞いたとき、どのような印象を持たれたでしょうか。私の場合、何歳くらいだったか覚えていませんが、仏教、キリスト教の両方で聞いたことがあると思います。国語辞書等によると、仏教では「らいはい」と読み、キリスト教では「れいはい」と読むということらしいですが、私自身の日常生活にはないものでしたから、何か神秘的な印象と、勝手に入ってはいけない世界なのだろうという、ちょっと怖い場所のような印象を受けたことを覚えています。おおよそ、日本のキリスト教の教会は出入り自由であると思いますが、初めての人が一人で教会の中に入れるか？と考えると、ちょっと勇気がいるかもしれません。ちなみに、神道では礼拝の仕方、手順が決まっているようです。

日本語の礼拝という言葉には、拝む、祈る、感謝する、という意味があるようです。要するに「行動」であり「行為」、あるいは「心の在り方」ですね。キリスト教の場合、偶像を拝んではいけない、という旧約聖書の教えから、何かの像に向かって祈ったり拝んだりすることはありませんが、仏教や神道の場合、何かしら具体的な拝む対象があって、祈ったり拝んだりされている光景をよく見かけます。仏教の寺院では仏像に向かって、神社であれば社の中にいる神々に向かってということでしょうか。

さて、私たちは今、キリスト教の教会の中にいます。私は、キリスト教という言葉はあまり好きではありません

んが、北浜チャーチという教会の中にいます。私たちは、ここ北浜チャーチの聖日礼拝に出席しています。礼拝に出席しているということになるとと思いますが、日曜日に各地の教会で持たれている礼拝に出席することが、キリスト教における礼拝なのか？こんなこと考えたことはありませんか？

こんなことばかり話しますと、何か理屈っぽいと思われるかもしれませんが、これくらいにしておきたいと思いますが、あらためて礼拝とは何か？と考えたときに、何が礼拝なのか。どこですることなのか。どうすることなのか。神に祈ること、感謝すること、捧ぐことが礼拝なのか。いろんな疑問が湧いてきます。

ということで、礼拝とは何か？ということを考えるために、まず聖書が教える礼拝のルーツについて考えてみたいと思います。

### 3.カインとアベル

創世記 4:3-7 節を開きましょう。創世記に登場する最初の人類です。

4:3 ある時期になって、カインは、地の作物から【主】へのささげ物を持って来たが、

4:4 アベルもまた彼の羊の初子の中から、それも最上のものを持って来た。【主】はアベルとそのささげ物とに目を留められた。

4:5 だが、カインとそのささげ物には目を留められなかった。それで、カインはひどく怒り、顔を伏せた。

4:6 そこで、【主】は、カインに仰せられた。「なぜ、あなたは憤っているのか。なぜ、顔を伏せているのか。

4:7 あなたが正しく行ったのであれば、受け入れられる。ただし、あなたが正しく行っていないのなら、罪は戸口で待ち伏せして、あなたを恋い慕っている。だが、あなたは、それを治めるべきである。」

有名な箇所ですから、みなさんご存知かと思います。エデンの園で、園の中央にある2本の木以外から、何をいつどのように食べてもよかったのですが、罪を犯して、エデンの園から追放されたアダムとエバは、自分たちで労苦して食べ物を得ることになります。

主へのささげ物を持ってきた初めての記事です。カインは地の作物から、アベルは羊の初子の最上のものを持って主の前に来ました。神は、アベルとそのささげ物とに目を留められました。

羊ならよくて地の作物はダメ、ということではないと思います。実際、旧約聖書を読み進めますと、神がモーセに与えられた律法のうち、レビ記には穀物のささげ物についても教えられています。

この記事の後、カインはアベルを殺してしまうという衝撃的なことが起こりますので、そちらの方に目が行きがちですが、なぜカインとそのささげ物には目を留められなかったのか。アベルとそのささげ物には目を留められたのか。この点について考えてみたいと思います。

余談ですが、少しだけ、私がバングラデシュを訪問したときに経験したことをお話ししたいと思います。2012年10月の後半に、バングラデシュのダッカに行きました。前職に勤務していたとき、ワールド・ビジョン・ジャパンのコーディネーターで、バングラデシュのダッカから北に自動車で4時間くらいのところにある町に小学校を建設したので、その開校式に出席するために行きました。もともと、軍事政権の国ですから、何かと危険なことが多いのですが、私が訪問した頃は安定していて、外国人でも訪問することができる状況でした。

今は、IS のテロが起こるような国ですので、おそらく外国人の渡航は危なく、制限されることもあると思います。

私が訪問した時は、ちょうどイスラム教のお祭りと、ヒンドゥー教のお祭りの時期になっていて、いつもよりも交通渋滞が激しくなると聞いていましたが、実際は思っていた以上に大変な状況でした。特に、私たちは首都ダッカから北に向かっていたのですが、反対側の車線では、ダッカに向けて各地からたくさんの方がお祭りに参加するために向かっていたため、3車線、4車線の広い国道に車が5列、6列になって、クラクションを鳴らしながら何十キロにも渡ってノロノロ運転をしていたので、進んでいるのか止まっているのかわからない状況が延々と続いていました。そのとんでもない状況を作っているたくさんの自動車のうち、何割かはトラックです。その荷台にはぎゅうぎゅう詰めになっている牛が載せられていました。何のための牛かわかりますか？イスラム教のお祭りでささげられる牛です。人と牛ではもちろん人の方が多いと思いますが、牛が詰め込まれたトラックもたくさんダッカに向かってノロノロ運転をしていましたので、何千頭というレベルではないと思います。

日本に住んでいますと、宗教と実際のこのようなささげ物にはあまり縁がありませんが、アジアの国ではいまだにこのような儀式が、国を挙げて行われているのを目の当たりにすると、「ささげる」という行為について、日本人的な感覚では正しく理解できないと思います。おびたしい牛が、ささげられるために首都ダッカに連れていかれる。そして、それらの牛は食用ではなく、ささげるために育てられていたということを考えると、生活の中にささげるという行為が根付いていることがわかります。

新約聖書では、また私たちが信じているイエスキリストによる救いを考えるなら、私たちにはユダヤ教やイスラム教に教えられているような、生き物のささげ物をささげる必要はありません。では、カインとアベル、そしてその後に延々と旧約聖書で教えられているささげ物の目的は何だったのか。習慣として、儀式として形だけ行えばよいのか。そうではなかったはずで。

神に受け入れられたアベルのささげ物について、もう一度創世記 4:4 を読みたいと思います。

4:4 アベルもまた彼の羊の初子の中から、それも最上のものを持って来た。【主】はアベルとそのささげ物とに目を留められた。

神は、ささげ物にだけ目を留められたのではなく、アベルとそのささげ物とに目を留められたと教えられています。神は、ささげ物を求めておられたのではなく、ささげ物を通して神に近づこうとするアベルを求めておられた。言い換えれば、ささげ物を通してアベルとの交わりを求めておられた、ということかと思います。また、アベルの目的は、羊の初子をささげるのではなく、神に近づくことでした。神に近づきたい、神のもとに進みたい、そのためにアベルができる最高の行為は、彼が育てていた羊の初子、その中でも最上のものを神にささげることでした。礼拝のルーツから学べる礼拝の目的は『神に近づくこと』ということが、アベルの行為から理解できると思います。

さて聖書では、礼拝という言葉は創世記 22 章に初めて使われています。アベルが行った行為も礼拝そのものですが、聖書が礼拝という言葉を使って紹介している記事は、創世記 22 章です。大変重要な記事です。今日は少

しだけこの記事についても考えてみたいと思います。

#### 4.アブラハムとイサク

創世記 22:1-2 を開きましょう。

22:1 これらの出来事の後、神はアブラハムを試練に会わせられた。神は彼に、「アブラハムよ」と呼びかけられると、彼は、「はい。ここにおります」と答えた。

22:2 神は仰せられた。「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そしてわたしがあなたに示す一つの山の上で、全焼のいけにえとしてイサクをわたしにささげなさい。」

アブラハムが 100 歳になったときに、神はアブラハムに、神の約束によって与えられた息子イサクをささげよ、と仰せられました。

アベルは羊の初子の中から最高のものをささげました。アベルがどのような思いでこの最高の初子を育てていたのかは教えられていませんが、彼が育てた羊の中で最高の初子は神にささげたい、という思いを持っていたでしょうから、アベルにとってこの礼拝は心から望んだことだったと思います。嫌々ささげたのではなかったはずで。

しかし、アブラハムにとってわが子イサクをささげるということは、大変大きな試練でした。試練という言葉では表現できないような苦しみがあったと思います。彼は、それまでも神に対していろんなささげ物をささげてきたのです。しかし、よもや自分の子をささげることになるとは思っていなかったでしょうし、神が人をそのままささげ物として、いけにえとしてささげるようなことを求められる、ましてや神の約束に従って与えられたイサクを、ささげ物として、全焼のいけにえとしてささげよ、と命じられるとは思ってもみなかったでしょう。

しかし、アブラハムは神のご命令をこのように表現しました。創世記 22:5 を開きましょう。

22:5 それでアブラハムは若い者たちに、「あなたがたは、ろばといっしょに、ここに残っていなさい。私と子どもとはあそこに行き、**礼拝**をして、あなたがたのところに戻って来る」と言った。

アブラハムは、お伴として連れて行った若い者たちに、礼拝をして戻ってくる、と告げました。彼は、最愛のわが子イサクをささげることが、礼拝と表現しました。これが、聖書に登場する最初の礼拝という言葉です。

彼はこの後、本気で自分の子イサクを全焼のいけにえとしてささげるために、たきぎの上にイサクを置きます。そして、刃で自分の子をほふるろうとしたときに、神の使いがアブラハムに神のメッセージを伝えます。創世記 22:12-18 を開きましょう。

22:12 御使いは仰せられた。「あなたの手を、その子に下してはならない。その子に何もしてはならない。今、わたしは、あなたが神を恐れることがよくわかった。あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しまないでわたしにささげた。」

22:13 アブラハムが目を上げて見ると、見よ、角をやぶにひっかけている一頭の雄羊がいた。アブラハムは行

って、その雄羊を取り、それを自分の子の代わりに、全焼のいけにえとしてささげた。

22:14 そうしてアブラハムは、その場所を、アドナイ・イルエと名づけた。今日でも、「【主】の山の上には備えがある」と言い伝えられている。

22:15 それから【主】の使いは、再び天からアブラハムを呼んで、

22:16 仰せられた。「これは【主】の御告げである。わたしは自分にかけて誓う。あなたが、このことをなし、あなたの子、あなたのひとり子を惜しまなかったから、

22:17 わたしは確かにあなたを大いに祝福し、あなたの子孫を、空の星、海辺の砂のように数多く増し加えよう。そしてあなたの子孫は、その敵の門を勝ち取るであろう。

22:18 あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。あなたがわたしの声に聞き従ったからである。」

イサクをささげることは、アブラハムにとって大きな試練でした。イサクが与えられるまでの、波乱万丈の人生を通して、神に従い、神を礼拝することこそ価値あることと何度も教えられてきたアブラハムでしたが、その子イサクが与えられたことで、彼の中心にはいつの間にか神ではなくイサクがいたのかもしれませんが。アブラハムに、最も価値あることが何かを思い起こさせるために、神はアブラハムに試練を与えられました。もし、アブラハムが神とともに歩む人生をギブアップしてしまうなら、アブラハムはイサクをささげなかったでしょう。しかし、彼は本気で最愛の子イサクをささげようとしていました。それは、イサクがどうしてもよい存在であったからではありません。神を取る代わりにイサクを捨てたということでも、イサクの代わりがいたからでもありません。アブラハムの信仰に対して、ヘブル書 11:17-19 ではこのように教えられています。

11:17 信仰によって、アブラハムは、試みられたときイサクをささげました。彼は約束を与えられていましたが、自分のただひとりの子をささげたのです。

11:18 神はアブラハムに対して、「イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる」と言われたのですが、

11:19 彼は、神には人を死者の中からよみがえらせることもできる、と考えました。それで彼は、死者の中からイサクを取り戻したのです。これは型です。

人間的な常識で考えれば、例えば一万頭の牛をささげることは大きな犠牲であり、またたくさんの資産をささげたということで、称賛に価すると思えることはできるかもしれませんが。しかし、自分の子供をささげる、しかも 100 歳になって与えられた子を、自分自身の手でささげるというのは、あまりにも酷い、厳しいことのように響きます。アブラハムはこの酷い、厳しいことに対して絶望した結果、自暴自棄になってイサクをささげたのではなく、ヘブル書の記者は、アブラハムが信じたこと、すなわち、神には人を死者の中からよみがえらせることもできるということに、アブラハムは期待した、信仰をもって信じた、信じたということをお教えします。イサクを失うためにささげるのではなく、再び取り戻すためにささげたということです。このように信じることができたのは、**アブラハムにとって最も安全で安心できることは、神とともにいることであつたからです。**礼拝を通して神に近づき、礼拝によって神とともにいることができるなら、アブラハムにかかわるすべての問題や試練は必ず解決されることを、アブラハムは信じていました。あらゆる犠牲やあらゆる危険は、礼拝、すなわち神とともにいることを通して必ず解決される。このことを信じ切っていたからこそ、彼は絶望の結果、子供を見捨てるように神にささげようとしたのではなく、必ず神はイサクを自分に返されるという信仰をもって、イサクをささげようとしたのです。

いかがでしょうか。アベルは、神に近づくために最上の羊の初子をささげました。ささげたことを通して、神

はアベルとそのささげ物に目を留められました。アブラハムは、最愛の子をささげようとしていました。アブラハムは、神が必ず約束の子イサクを自分に返してくださるという信仰を持っていました。神から遠ざかるよりも、神に近づき、神の御心に従う方が安全で安心であり、自分が望む結果を得るための最善の行動は、神を礼拝することであると理解していたからです。

これらのことから学べるのは、礼拝とは何かを持ってくる、どこかの場所に行く、ということではなく、**神に近づくことであり、神とともにいることそのものであるということです。**アベルもアブラハムも、そのために、それぞれに求められたささげ物をささげました。

では、私たちは何をささげればよいのでしょうか。どのように神に近づけばよいのでしょうか。

### **5. 私たちは何をささげるのか？どのように神に近づけばよいのか？**

まず、私たちと旧約聖書に教えられているささげ物との関係について考えたいと思います。ヘブル書 10:1-3 を開きましょう。

10:1 律法には、後に来るすばらしいものの影はあっても、その実物はないのですから、律法は、年ごとに絶えずささげられる同じいけにえによって神に近づいて来る人々を、完全にすることができないのです。

10:2 もしそれができたのであったら、礼拝する人々は、一度きよめられた者として、もはや罪を意識しなかったはずであり、したがって、ささげ物をするのは、やんだはずで。

10:3 ところがかえって、これらのささげ物によって、罪が年ごとに思い出されるのです。

ヘブル書の記者はここで、律法には『すばらしいものの実物』がない、と教えています。律法はすばらしいものの影であるために、律法に定められているいけにえによって神に近づく人を完全にすることはできなかった、と教えています。近づくことはできても、近づく人々を完全にすることができないため、彼らはささげ続けなければならず、またささげることによって罪を思い出すことになったのです。

しかし、私たちに対してイエス・キリストが与えてくださった救いについては、この律法との対比、比較によって、このように教えられています。ヘブル書 10:14 を開きましょう。

10:14 キリストは聖なるものとされる人々を、一つのささげ物によって、永遠に全うされたのです。

旧約聖書の時代は、神に近づくために、律法に従っていた人たちは、絶えずささげ物を持ってこなければなりません。神に受け入れられるためのいけにえを絶えず持ってこなければならないのは、そのいけにえが完全なものではなかったからです。しかし、キリストは一つのささげ物によって、私たちを永遠に全うされました。神の御子であり、完全なキリストご自身を、ささげ物としてささげてくださいましたことにより、私たちはもはや自分自身でささげ物を携えなければ神に近づくことができないものではなく、**いつでも、どのような場所でも神に近づくことができるものと変えられたのです。**何も持たずに、どのような場所でも神に近づくことができます。**キリストによるあがないによって、私たちが神に近づくためのささげ物は不要となりました。**

では、私たちは何もささげなくてよいのか。そうではありません。神は、私たちにこのように教えています。ローマ 12:1 を開きましょう。

12:1 そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。

もちろん、ここで教えられているのは、私たち自身の体を、旧約聖書に教えられているような形でささげよ、ということではありません。私たちがどのようなことであっても神のご用にあずかることができるために、私たち自身を神にささげよ、とパウロは教えました。1節の『礼拝』という言葉は、別の訳によると『奉仕』と訳されていますので、12章の後半で教えられていることとの間に関連性があることがわかると思います。ローマ書12章の後半を読むと、これがそれぞれに与えられる神からの働き、賜物に従って奉仕することと教えられています。ローマ12:4-8にはこのように教えられています。

12:4 一つのからだには多くの器官があって、すべての器官が同じ働きはしないのと同じように、

12:5 大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。

12:6 私たちは、与えられた恵みに従って、異なった賜物を持っているので、もしそれが預言であれば、その信仰に應じて預言しなさい。

12:7 奉仕であれば奉仕し、教える人であれば教えなさい。

12:8 勧めをする人であれば勧め、分け与える人は惜しまずに分け与え、指導する人は熱心に指導し、慈善を行う人は喜んでそれをしなさい。

4-8節で、重要なこととしてパウロが教えているのは『私たちは一つのからだ』であることと『ひとりひとり互いに器官』であることです。一つのからだであり、それぞれ与えられている役割が違います。そして、それぞれ与えられている役割をしっかりと果たすことが神に求められている奉仕であり、その奉仕そのものが神を礼拝することであることをパウロは教えています。

整理しましょう。今まで学んだことのポイントは、次の通りです。

- 1) 礼拝とは『神に近づくこと』であり、『神とともにいること』
- 2) 旧約聖書の時代は神に近づくためにいけにえが必要であった
- 3) イエス・キリストのあがないにより、私たちが神に近づくためのいけにえは不要となった
- 4) 私たちの奉仕が神を礼拝することであり、神に対するささげものである

このようになります。

最後に、ユダヤ人の失敗、そして私たちが陥りやすい失敗について考えて、本日のメッセージを終えたいと思います。

## **6.ユダヤ人の失敗、私たちが陥りやすい失敗**

礼拝について、ユダヤ人の大きな失敗は、礼拝の形骸化、形だけの礼拝ということだと思います。神は、モーセを通して会見の天幕としての聖所、至聖所について示されました。礼拝をささげるためのささげものの規定、祭司、レビ人に関する規定、会見の天幕に関する規定を定め、その通りに行うように命じられました。しかし、礼拝の目的は神に近づくこと、神にお会いすることです。神は、ユダヤ人に示された礼拝の場所を『会見の天幕』と称されました。出エジプト記29:42にはこのように教えられています。

出 29:42 これは、主の前、**会見の天幕**の入口で、あなたがたが代々にわたって、絶やすことのない全焼のいけにえである。その所でわたしはあなたがたに会い、その所であなたと語る。

神は、定められたようにユダヤ人が行うことで、「わたし（神）はあなたがた（ユダヤ人）に会い、その所であなた（ユダヤ人）と語る」ことを示されました。目的は、神にお会いし、神の御声を聞くことでした。

この目的からそれることがなければ、この目的を見失うことがなければ、ユダヤ人の礼拝が旧約聖書において形骸化することはもう少し防げたのかもしれませんが。しかし、彼らはこの礼拝を継続することができずに、その歴史において度々、神ならぬものを拝むようになってしまいました。

私たちの信仰生活、クリスチャンとしての生活を考えたときに、同じような失敗に陥ってしまうことがあるかもしれません。私たちは、礼拝、聖日礼拝に出席することや、教会の様々な奉仕を担当することの目的をしっかりと握っていなければ、礼拝には出席しているし、担当する奉仕においても、その責任を果たしているにもかかわらず、それが私たちにとって現実的にはプラスになっていない。来ているし、やっているのだけれど、私たちの内面的なところで得るものがない、あるいは少ない。もしこのようなことを感じるのであれば、私たちは何のために礼拝に出席し、何のために奉仕を担当しているのかを自分自身でしっかりと受け止めなおす必要があると思います。

私たちの礼拝、私たちの奉仕の目的は、この世の仕事や義務的な儀式が持つ目的とは全く違います。礼拝の目的は神にお会いすることです。神にお会いするために礼拝するのです。また、神にお会いするために奉仕を行うのです。今日の礼拝、今日の奉仕を通して、私自身が神にお会いできるかどうか。ユダヤ人が会見の天幕を通して神にお会いし、神の御声を聞くことができたなら、私たちはもっと神に近づくことができ、神の御声をもっと鮮明に聞くことができるはずです。形だけの礼拝、形だけの奉仕を行っても、おそらく私たちにとっては益にならないでしょう。目的をはっきりと覚えて、そのために礼拝し、奉仕する。これを継続することができれば、私たちの信仰生活は豊かで実りある生活へと変えられます。

祈りましょう。